The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞John C. Maraldo, Japanese Philosophy in the Making 2 : Borderline Interrogations
Author(s)	宮本, 祐規
Citation	共生学ジャーナル. 2022, 6, p. 300-307
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86438
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

John C. Maraldo
Japanese Philosophy in the Making 2: Borderline Interrogations
Chisokudō Publications、2019 年、516 頁

宮本祐規*

1. はじめに

Japanese Philosophy in the Making 2: Borderline Interrogations はジョン・C・マラルドの著作であり、京都学派の思想について論じられている。マラルドは京都大学の客員教授、南山宗教文化研究所の研究員などを経て、現在はノースフロリダ大学の哲学の名誉教授であり、日本哲学の研究者として知られている。日本哲学を扱ったものとして *Rude Awakenings: Zen, the Kyoto School, & the Question of Nationalism*（1995）、*Japanese Philosophy: A Sourcebook*（2011）などの編著がある。また、特に西田幾多郎（1870-1945）の哲学の研究者として知られており、本書の前編にあたる *Japanese Philosophy in the Making 1: Crossing Paths with Nishida*（2017）では西田の思想を詳細に論じた。

さて、本書冒頭においてマラルドは「哲学は trans-lation を通じて生じる」（p.1）と述べる(1)。trans-lation とは「テクストに埋め込まれた問題、方法、用語の変換（transformation）」であり、それは「自然言語間および自然言語内の両方」において行われる（p.1）。哲学的に思考することとは絶えず言葉を解釈することであり、それは異なる言語間での翻訳や解釈に留まらず、同じ言語の中でも行われるのである。日本哲学は西洋哲学や儒学思想、仏教思想を受容し、それらに再解釈を与えることで新たな思想を展開してきた。この点において、日本哲学は trans-lation の実践の最たる例なのである。そして、日本哲学の中でもマラルドが特に焦点を当てるのが京都学派の思想である。京都学派は西田幾多郎を中心として主に戦前に影響力を持っていた哲学者、思想家からなる学派である。西洋哲学や東洋思想に幅広い関心を持ち、そこから独自の思想を展開していった者が多く、現代思想にも多くの影響を与えている。また、日本語で思索を行ったことも特徴的であり、trans-

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系　博士前期課程 1 年；
u344934k@ecs.osaka-u.ac.jp

lation の実践として注目に値する。

2. 本書の概要

本書は五部構成である。第一部では和辻哲郎（1889-1960）の倫理学が論じられる。マラルドいわく、和辻は解釈学的手法を用いてカントなどの倫理学を trans-lation し、その倫理学を作り上げた。第二部では田辺元（1885-1962）の懺悔道が、第三部では九鬼周造（1888-1941）の偶然性論が扱われる。両者は共に浄土教の教えを読み替えて自身の哲学に生かしており、仏教思想からの trans-lation を行っているとマラルドは指摘する。第四部は京都学派と戦争との関連について論じられる。マラルドは「欧米列強からアジアを解放する」として戦争を後押しした当時の京都学派の状況が「同盟国を守るため」との理由で世界各地で力を誇示する現在のアメリカの状況と似ているとして警鐘を鳴らす。第五部では従来の世界観、自然と人間の区別が問い直されている。従来の見方においては、単一化され得ない対象が単一化され、自然と人間の相互作用が見落とされているとマラルドは述べ、多様な視点を持つことの重要性が強調されている。

3. trans-lation の哲学とは何か

本書は trans-lation の哲学として京都学派を位置づけることを目的としているが、それはいったいどのような特徴を持つのだろうか。先に見たように、trans-lation とは「テクストに埋め込まれた問題、方法、用語の変換」のことを指すが、これだけを見ると単なる translation（言い換え、翻訳）との違いが分からない。マラルドの他の記述から、trans-lation の特徴を探ってみよう。

マラルドは「日本哲学が trans-lation から生じる〔中略〕ならば、それは本質的に中間の（in-between）分野として提示される」（p.2）と述べる。in-between には「中間的なもの、媒介物」という意味がある。また、マラルドは「intercultural philosophy が最も明白にこの trans-lation を認識する哲学的実践」（p.6）であるとし、「intercultural philosophy の inter は差異の距離があることを意味している」（p.4）と述べる。この inter には異なる分野の境界に挑

み、時にその境界を消す力があるという（p.5）。これらを総合すると、マラルドは trans-lation の哲学を相異なる二つ（以上）の思想・哲学を媒介し、時にそれらの境界を消すような、中間的な哲学と捉えているのではないかと考えられる。

しかし私は trans-lation の核心的意味はそこにはないと考える。というのも、このような哲学からは新たな思想が生まれ難いからである。例えば A と B の二種の思想があって、それを trans-lation したとする。先の意味合いで trans-lation を理解すると、そこには「A と B の最大公約数」としての思想しか残らない。マラルドが着目した京都学派の哲学者たちの思想とは、そのような中間的な思想に留まるものではない。そこには種々の思想の読み替え、すなわち「変換（transformation）」が見てとられるはずだ。マラルドは trans-lation の間や媒介の側面に着目することが多いように思われるが、強調されるべきは「変換」の側面である。

変換の側面から捉えた時、trans-lation の哲学としての京都学派は新たな姿を現す。例えば西田は、ヘーゲルの思想やプラグマティズム、仏教の「無」の概念を基盤としつつも、それらの意味内容を変換させ、独自の哲学体系を形成した。それは各思想の媒介としての静的な思想ではない。むしろ、各思想との共通項は保ちながらも、それらとの差異を生み出していくような動的な思想であり、それでこそ新たな思想が生まれたのである。

このように、trans-lation とは中間的で静的なものとして捉えられるべきではない。それはある思想との共通項を保ちつつも、そのような思想から差異化していく動的な変換でなければならないと私は考える。そしてマラルドがこの意味での trans-lation を積極的に試みているのが本書第三部であろう。第三部においてマラルドは、『浄土教』の読み替えとして九鬼周造の偶然性論を読もうとする。

4. 浄土教の trans-lation としての偶然性論

第三部の検討に移る前に、九鬼周造の偶然性論を簡単に見ておこう。九鬼は偶然を「定言的偶然」、「仮説的偶然」、「離接的偶然」の三種に分類して論じる(2)。これらの核心的意味は、それぞれ「個物および個々の事象」、「一の

系列と他の系列との邂逅」、「無いことの可能」である。三種の偶然は互いに分離しているのではなく、定言的偶然は仮説的偶然に、仮説的偶然は離接的偶然に基づいている。そしてこれらを原本的に規定している偶然性の根源的な意味は「二元性」であると九鬼（1980:254-255）は述べる(3)。二元が邂逅してはじめて偶然性が生じるのである。

マラルドが注目するのは、偶然性論の結論部で道徳について論じられている際、九鬼が『浄土論』から「観仏本願力、遇無空過者」という一節を引いていることである。マラルドは九鬼が浄土教の思想を四重に変換（conversion）して偶然性論を結んでいると主張する。なお、本書第三部第三章には「九鬼による浄土教の四重の変換」という題がつけられており、変換としての trans-lation を試みようというマラルドの気概が見てとれる。

マラルドは九鬼が以下の四つの変換を行ったと主張する（p.284）。

①本願の偶然性から邂逅の偶然性への変換
②現在の偶然性から未来の可能性への変換
③阿弥陀仏との邂逅から自己と他者の邂逅への変換
④本願から道徳的命令への変換

順を追って見ていこう。①では、「観仏本願力、遇無空過者」の偶然の邂逅への読み替えがなされる。「観仏本願力、遇無空過者」とは「阿弥陀仏の本願に気がつけば救われる」という意味である。また、本願とは衆生を救うために阿弥陀仏が立てた誓願のことである。浄土真宗の教えでは、救済は自己の修行によってはなされず、本願に気がついた時になされる。この「本願に気がつく」すなわち「本願と邂逅する」という契機こそ偶然そのものであり、これがなければ救済もないのである（p.275）。

②では、偶然性と未来とのつながりが問題とされる。『偶然性の問題』（1935）の結論において、九鬼は真の意味での偶然性は未来に基礎づけられる必要があると主張する（九鬼 1980:259）。一方で九鬼は離接的偶然を論じた際に「偶然性の時間性は『いま』を図式とする現在」（九鬼 1980:209、強調原文）であり、未来は可能性の時間性であると述べていた。現在という時間性を持つ偶然性は、いかにして未来と結び付けられるのだろうか。

ここでマラルドが着目するのが浄土教において本願が成就される過程で

ある。マラルドの説明は次のようなものである。阿弥陀仏はもともと法蔵比丘という菩薩であったが、衆生を救うために本願を立てた。本願が成就される時、法蔵比丘は阿弥陀仏になり、衆生は救済されるという。しかし、現実世界を見ると全ての人が救済されているわけではない。したがって、本願の成就は未来の出来事であり、いまだ可能性のままであると考えられる。ところが、『無量寿経』によるとはるか昔に本願は成就され、法蔵比丘は阿弥陀仏となったという。そして阿弥陀仏は現在でも教えを説いているとされる。ここに矛盾した状態が生じている。本願が成就されていないにもかかわらず本願が成就されているという状態、すなわち未来の可能性が現在において実現されているという図式が見られるのである（pp.277-278）。マラルドは、本願が成就されるこの過程を九鬼が自身の偶然性論にあてはめることにより、現在という時間性を持つ偶然性が未来に基づくことを説明したと理解するのである。

②までの説明では、九鬼の偶然性は阿弥陀仏という絶対者との邂逅から説明されることになる。しかし偶然性論の結論部において九鬼は超越的存在との邂逅ではなく、自己と他者との実存的な邂逅を論じている(4)。マラルドいわく、「九鬼は阿弥陀仏とその本願力との邂逅からあなた（の中にある絶対者）との邂逅へ移る」のである（p.281）。③の変換を経ることで、九鬼の偶然性論は形而上学的議論から経験的議論へと移行しているとマラルドは理解する。

さて、絶対者である阿弥陀仏との邂逅は本願との邂逅を意味し、それは人々が救済されることを意味した。この「救済」は形而上学的議論でなされたものだが、経験的議論へと移行した今、これはどのように理解されるべきであろうか。マラルドは「救済とは死を運命づけられた我々が、自らの偶然的な実存に意味を与えることができる方法である」（p.283、強調原文）と述べる。偶然の現在において、我々は自らの生に意味を与えることで、その脆い生を営むことができる。また、自らの生に意味を与えることは、未来によって偶然性を基礎づけることにほかならない。

ここで意識されなければならないことは、偶然性論の結論部で九鬼が道徳を問題としている点である。ここまでの説明では、九鬼が『浄土論』の思想を変換してその偶然性論を理解した（とマラルドが主張する）ことが確認

された。九鬼は偶然性論の最後でその理解を道徳的命令へと変換させる。九鬼は「遇無空過者（遇うて空しく過ぐるもの無し）」を「遇うて空しく過ぐる勿れ」（九鬼 1980:260、強調引用者）と書き換えたのである。④の転換とはこのことを指している。そしてこの命令の意味は、①から④を踏まえると次のように定式化できるだろう。すなわち「自らの偶然的な生に意味を与え続けよ」である。

マラルドは浄土教を trans-lation させたものとして九鬼周造の偶然性論の結論部を扱った。阿弥陀仏の本願から着想を得たような解釈は従来の日本語文献ではあまり見られず、私の目には新鮮に映った。九鬼の偶然性論を大きく動的に変換させたという点で、マラルドは trans-lation に成功したと言うことができるだろう。

仏教を含む東洋思想の trans-lation として九鬼哲学を捉えることは九鬼研究にとって重要である。九鬼は「時間の観念と東洋における時間の反復」（1928）と「形而上学的時間」（1931）において永遠回帰の時間を論じているが、その記述の多くはバラモン教や仏教の経典に負っている。そのため九鬼が東洋思想からかなりの着想を得ていたことは間違いない。しかし、東洋思想解釈を中心テーマとして九鬼哲学を読み解こうとする日本語文献は少ない(5)。その重要性を意識させたという点においても、マラルドによる九鬼解釈は評価されるべきである。

5. おわりに

本書では西洋哲学、東洋思想を幅広く受容して再解釈を与え、新たな哲学を作りだした京都学派の多様な思想が取り上げられ、trans-lation の哲学としての京都学派が持つポテンシャルが広く示された。

また、最後に着目すべき点として、本書そのものが trans-lation の実践であることが挙げられる。それはマラルドによる記述そのものが trans-lation であるということである。例えば第三部においてマラルドは九鬼の偶然性論を「九鬼による浄土教の trans-lation」であると捉えた。しかしそれは同時に「『九鬼による浄土教の trans-lation』であるというマラルドの trans-lation」でもある。この第三部において、マラルドは種々の先行研究を参照しながら

九鬼の記述を読み解き、そこに解釈を与えた。それらの先行研究は九鬼の手によるものではなく、マラルド自身の考察も加えられる以上、それらに基づく九鬼解釈は九鬼自身の記述からは大幅に変換されたものとなっている。九鬼が浄土教を trans-lation して自身の偶然性論の結論部を作り上げたというマラルドの指摘は正しいが、九鬼がそこに与えたよりはるかに多くの意味がマラルドの記述には込められている。これはマラルドの九鬼解釈が不正確であるという指摘ではない。trans-lation が動的な「変換」という意味を持つ以上、本来的に起こる事象なのである。

そしてこのことは本書に限ったことではない。哲学的な文書は、他の哲学的思想からの差異化、変換によって完成される。そこには trans-lation が必ずある。また、哲学的な文章を読み、解釈する際にも trans-lation が生じている。書き手と読み手の思考が完全に一致することはなく、差異化、変換が常にあるからである。本書冒頭でマラルドが「哲学は trans-lation を通じて生じる」と言ったのもこの意味である。哲学的にものを考え、読み、書く際には trans-lation が伴うことを常に意識しなければならないと本書は暗示しているのである。

注

(1) *Japanese Philosophy in the Making 2* から引用する際は丸括弧内に頁数を示す。

(2) 『偶然性の問題』（1935）では「定言的偶然」、「仮説的偶然」、「離接的偶然」の名称が用いられているが、博士論文「偶然性」（1932）など他の偶然性論の論考においては、これらに代わって「論理的偶然」、「経験的偶然」、「形而上的偶然」が用いられた。ただし前者の三つの分類と後者の三つの分類は完全に一致するわけではなく注意が必要である。偶然性の呼称と分類については古川（2015）の第三章を参照されたい。

(3) 九鬼（1980）から引用する際は旧字体を新字体に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改める。また、原文で強調の際に用いられる圏点は傍点に改める。

(4) 「孤在する一者はかしこにここに計らずも他者と邂逅する刹那、外なる汝を我の深みに内面化することに全実存の悩みと喜びとを繋ぐものでなければならない」（九鬼 1980:258）。

(5) バラモン教や仏教の解釈を通じて九鬼の永遠回帰論を読み解いた日本語文献として、伊藤（2014）が挙げられる。

参照文献

伊藤 邦武 2014『九鬼周造と輪廻のメタフィジックス』ぷねうま舎。

九鬼 周造 1980『九鬼周造全集　第二巻』岩波書店。
古川 雄嗣 2015『偶然と運命―九鬼周造の倫理学』ナカニシヤ出版。